

統計学

第 108 号

論文

統計的マッチングにおける推定精度とキー変数選択の効果

- 法人企業統計調査マイクロデータを対象として — 栗原由紀子 (1)
下位集計における価格変動とバイアス 鈴木 雄大 (16)

研究ノート

付加価値の数量測度としてのダブルデフレーションとシングルデフレーション

- 日中GDP統計に関連しながら — 李 潔 (32)
政府統計学習システム「すたなび」の活用効果に関する考察 小野寺 剛 (42)
兵庫県観光GDPの推計と利用上の課題について 芦谷 恒憲 (53)

書評

齋藤 昭 編著 『「農」の統計にみる知のデザイン』（農林統計出版，2013年）

- 田中 力 (63)
長屋政勝 著 『近代ドイツ国家形成と社会統計：19世紀ドイツ営業統計とエンゲル』
（京都大学学術出版会，2014年） 坂田 大輔 (68)

海外統計事情

- 奈良観光統計ウィーク 大井 達雄 (75)

追悼

- 浜砂敬郎会員を偲んで 伊藤 陽一 (79)

本会記事

- 支部だより (83)
『統計学』投稿規程 (87)

2015年3月

経済統計学会

浜砂敬郎会員を偲んで

伊藤陽一*

【私は、浜砂さんが寄稿者でもあった学会の政府統計研究部会ニュースレターNo. 25（2014年10月26日発行）に追悼文を書いた。これを念頭においてか編集者から本誌への追悼文を依頼された。先の追悼文の一部修正にとどまることをお許しいただきたい】

1. 早すぎる逝去

浜砂さんがドイツに滞在していることは、8月初めにご本人からメールをもらって承知していた。夏休みを中心にひんぱんにドイツにでかけられているのはいささか羨ましく、またドイツの刻々の統計事情をフォローされている姿は、現代ドイツ統計の研究者として見上げたものであると尊敬していた、提供される情報は、日本の統計界（学会一経済統計学会のみならず日本統計学会、そして政府統計分野）にとっても貴重であった。

その浜砂さんが、フランクフルト大学に滞留中の8月27日に心不全で亡くなられた。1946年生まれであるから70歳前で、九州大学経済学部を定年退職した後、長い間をおいていない。旺盛な研究は継続しており、大学の授業や雑務を免れたことで、さらに研究が積み上げられ、ドイツ統計学、ドイツやヨーロッパの統計状況、さらに統計理論一般に関する著作も射程に入っていただろうことを考えると、残念というより他ない。

浜砂さんの研究業績は膨大にわたる。浜砂さんについてリストを作成し、テーマ分野別にその主張や特徴を論じるのが研究者に対す

る通常の追悼かとも思う。しかし、九州大学経済学部は、退職記念の紀要を発行せず、業績リストを作成してはいないと西村善博さんからうかがった。私は少しやりかけたが作品数が多いので無理と判断した。私の手元に数多くある浜砂さんの著作をフォローし再検討する時間的余裕をさしあたり持たない。浜砂さんの業績に関わって個人的記憶によって少しだけふれ、また思い出を記して追悼に代えたい。

2. 研究

以下は、個人的記憶・感触・憶測に基づくので、浜砂さん自身から矮小化するなど言われ、また関係者から誤解であるとのお叱りを受ける可能性がある。お許しいただきたい。

2.1 研究一筋

浜砂さんの若い時にはじまって、40代、50代、60代と年齢を増すにつれて、年々の論文等の執筆数は増えていっているのだろうか。離れて遠くから見ている私は以下のように受け止めていた。すなわち、特に統計利用論の具体化をドイツの産業連関論に求める中、折からのプライバシー侵害からするドイツの国勢調査中止事件に遭遇した。浜砂さんはこれを、日本に先立ちながら、以後の先進国の統計に共通する問題とみて、マイクロデータやレジスター・ベース統計に及ぶドイツ・ヨーロッパの統計事情を現在まで検討されてきた。もちろん日本や合衆国にも言及しながらである。研究の成果は、九州大学経済学部の紀要、プロジェクトの成果本、『統計学』、日本統計研

* 法政大学名誉教授

究所の諸出版物，科研費マイクロデータ・プロジェクトの冊子類，また政府統計研究部会ニュースレター等で公にされている。この中には浜砂さん自身が組織されたと思われるプロジェクトの成果本も多くある。同時に幾つかのトピックスを抱え進めつつ，翻訳をふくめて連続して発表してきた。「研究一筋」をうかがわせる。

2.2 大屋説の統計利用分野での展開

いわゆる大屋説は，1960～1970年代のこの学会の主流であった「社会科学方法論説」—統計学の研究対象を統計方法におき，さらに「科学方法論」に傾斜した—に異を唱えたとは私はみている。大屋説は蜷川調査論の再吟味の上に構築された。ここで，統計利用論ではどう展開されるのかというのが私の関心だったが，浜砂さんがこの分野を担ったと思われる。浜砂さんは1976年の学会創立20年の機関誌記念号の「統計利用」で枠組みを示し，1990年の大屋編『現代統計学の諸問題』の第4章「統計利用の論の基本視角」で吉田忠会員との論議への回答の形でその見解を示している。浜砂さんの立場は，記念号2号（1986年），第3号（1996年）でも貫かれている。吉田会員との論争には立ち入らないが，浜砂さんは，上杉→大屋→浜砂による統計利用論（記念号で浜砂さんが，上杉→大屋としているのは非常に興味深い）は，段階的变化を遂げる国家社会体制の統計利用への影響をも視野に入れた枠組みをこそ基礎にしているのであり，方法論だけを切り離して孤立的に論じることにはまずいとして，社会科学方法論説を批判しようとしたとは私は理解した。社会科学方法論説は国家による統計利用の批判を十分に意識していたが，統計学の理論枠組みとしては，浜砂さんの指摘の方が妥当であると私は考える。しかし，枠組みは妥当とした上でそれぞれの統計手法にそくしての検討ではどうなるのか。社会科学方法論説の諸

論者の検討がより詳細であったようにも思える。社会科学方法論説の論議は大屋説の大枠に包摂される，というのは，現実社会での統計や統計方法の在り方がそういう構造になっているからである，とは私は考えている。浜砂さんは，ドイツで統計学・制度・統計環境の変化を観察しながら，展開しようとしたのだろうか。私の考えとの異同も知りたかったし，浜砂さんと論議しなかったことが悔やまれる。

2.3 ドイツ統計学・研究の展開・拡大とフォン・シーボルト賞授与

浜砂さんのドイツに関する研究は膨大であり，幾つかのトピックスに分けなければなるまい。ドイツの統計学，産業連関論，統計制度（連邦と州），センサス・マイクロセンサス，プライバシー保護と国勢調査中止事件，調査統計から行政記録・レジスターをベースとする統計への転換傾向……等々。これらには立ち入らないが，浜砂さんは，ドイツの統計調査関係の法規も逐次翻訳しながら詳細な資料を日本の統計界に提供してくれた。浜砂さんならではの独自の大きな貢献である。この研究はドイツ側からも高く評価されて，1997年に「学問上すぐれた業績をあげた日本人研究者」を対象にした「フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト賞」を授与されている。このような研究者を同じ学会員・友人に持てたのは嬉しいことである。

2.4 ミクロ統計，調査環境悪化の検討など

1996-1998年に日本における政府マイクロデータの利用の拡大を強く促す大規模な研究が，松田芳郎氏を代表として科研費交付の下に進められた。この研究体制を支えた主要メンバーの1人が浜砂さんで，自らEUやドイツのマイクロデータに関する法規を詳細に検討している。以上とも重なるが，「社会統計研究者の中で特に統計制度に関心を持っている若手研究者を中心とする」チームによる

1982年の翻訳—マーティン・バルマー編/日本統計研究所訳『統計調査とプライバシー』（梓出版社）を含めて、統計調査環境の悪化の調査など、浜砂さんは多方面に研究の手を広げている。下の3.⑥でふれる2010年国勢調査での愛知県東浦町事件についても詳細な記録を作成しつつあった。

2.5 日本統計学会と経済統計学会の橋渡し役

研究内容ではないが、浜砂さんは大屋先生の姿勢を受け継いで、日本統計学会に継続して参加して研究報告をし、評議員の任を務められていた。日本統計学会会員でありながら一思うにこの学会は今日でいう社会統計学の代表的論者が結集して発足したのだった一、たまにしか参加しなかった私からは「御苦労さま」という他ない。この努力が、日本統計学会で、社会統計学的関心のあるメンバーとともに「官庁統計セッション」の設定を可能にし、マイクロデータ研究その他で、日本統計学会と経済統計学会メンバー、さらに政府統計家との間の研究交流を促し活発化した大きな要因だろう。大屋先生と浜砂さん（当学会の代表運営委員をも担われた）は両学会の橋渡し役を長期にわたり担われたといえるだろう。

3. 幾つかの個人的思い出

浜砂さんの研究に関する以上の叙述は、表層的で申し訳ない限りである。その他に、私には浜砂さんと幾つか個人的交流・思い出がある。幾つかにふれたい。

① 経済統計研究会時代の1960年代から1970年代にかけて、私は浜砂さんとそれぞれ若手会員あるいは院生会員として顔を合わせていたが、1977年10月の経済理論学会・新潟大会の共通論題で私が「現代日本の階級構成と資本家」を報告した時に会場で報告終了後に顔をあわせた記憶がある。おそらく他の経済統計研究会（当時）メンバーは出席し

ていなかったろうから、経済理論学会会員で政治経済学的関心も高い人なのだと印象付けられた。

② 1970年代に、いわゆる大屋理論が研究会の論議に登場してくるたびに、2.2で書いたように、大屋会員の説を継承・展開している若手の論者なのだと受け止めていた。

③ 次第におつきあいを深めるようになったのは、1990年代末から2000年代に続く各国センサス、マイクロデータ、レジスター・ベース統計等の研究の過程であり、2.4でふれたプロジェクトの特定チーム、法政大学日本統計研究所のプロジェクト、浜砂さん自身が主導した科研費その他のプロジェクトを通して、であった。

④ その間、日本統計研究所の国際セミナー「各国センサス」に関わって、英米独からのゲストのホスト役で浜砂さんとわれわれ夫妻とで、八王子の「うかい竹亭」でお礼の会を持ったことがある。特にドイツからの報告者が竹に囲まれた和室の庭や川に感じ入り、皆さんとうまい酒を交わして楽しく、浜砂さんもお機嫌だった。福岡他でも何回か酒を汲み交わした。

⑤ 2003年度に私がメリーランド大学カレッジパーク校に滞在してシルバースプリングに住んでいたとき、私の家に1泊して酒とともに論議を重ねた。論は日本の左翼の在り方にも及んだ。大枠で一致しながら細部では見解の違いが残ったが、浜砂さんは、自分の道を探りつつ悩む真面目な方なのだと受け止めたものだった。翌日、国立公文書館Ⅱで館の利用方法を案内した。浜砂さんはその場で入館証を作り、独自に資料を借り出して半日を過ごした。DCの中心で落ち合っただけでセンサス局に直近の地下鉄駅まで同行したこともあった。

⑥ 最後にお付き合いしたのは、2013年3月3日の日本統計学会の学習院大学での春季大会であった。愛知県東浦町での2010年国

勢調査での人口水増し事件に注目して、浜砂さんが申請したセッション「政府統計におけるモラルハザード」での司会者を請われて引き受けた。浜砂さんは、日本の政府統計体制が統計調査環境悪化の中で今後うまく対応・機能するかについて大きな危惧を持っていた。

その他にも、浜砂さんは、私が追跡していた「統計の品質」論に関心を示してくれたし、私の反原発等の個人的発信に、賛同のメールを返してくれたことも多い。

浜砂さんが幾つかの（酒の入った）場で論

争をいどんだ話を聞いたことがある。幸か不幸か、どの場にも私は居合わせることがないので状況はわからない。それでも浜砂さんなりに、研究の積み上げを背景としての自信を持ってのことでなかったのか、とも思う。

それはともかくとして、一途にスケールの大きな研究を積み上げられており、今後も研究を積み上げられるはずの、そしてある意味で賑やかな浜砂さんが突然居なくなったことは大変に寂しい。日本とドイツの統計研究分野での大きな損失というべきである。